In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	恩寵の悲劇,『ポリュクト』：バロックと演劇(X)
Author	藤井, 康生
Citation	人文研究. 43 巻 2 号, p.83-107.
Issue Date	1991
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

人文研究　大阪市立大学文学部
第 43 巻　第 2 分冊 1991年 19〜43

恩寵の悲劇，『ポリュクト』

—— バロックと演劇（X）——

藤　井　康　生

コルネイユの四大悲劇の頂点に立つ『ポリュクト』（1643）の舞台は，アルメニアの首都メリテーヌである。これは古典劇の場所設定としては異例である。アルメニアというのは世界で最初にキリスト教に帰依した国として知られ，それは四世紀の初めのことであった。『ポリュクト』の時代設定は，コルネイユ自身が「自作吟味」（1660）のなかで「ポリュクトは，紀元250年にデキウス皇帝の治下に生きていた」[1] と述べているように，キリスト教が公認される以前，つまり征服者のローマ軍によってキリスト教が厳しく弾圧されていた時期である。主人公のポリュクトは実在の人物で，コルネイユは『ポリュクト』の冒頭に「聖ポリュクトの殉教の摘要」という文書を付け，この殉教者の伝記を『聖者伝』から採ったことを明らかにしている。その『聖者伝』とは，十世紀のコンスタンチノープルの伝記作者メタフラストによって書かれ，ヴェネチア人のリッポマーニ，さらに十六世紀のドイツの修道士ズリウスによって補足されると同時に簡約されたものだが，このズリウス版は，さらにドイツ人のモザンデールによって増補されて1570年に出版されており，コルネイユが利用したのはこのズリウス＝モザンデール版である。コルネイユによれば，他にもポリュクトに触れた聖者伝はあるのだが，いずれも簡略に過ぎ，ズリウス版のみがポリュクトについて長々と触れているのである。コルネイユは前述の「聖ポリュクトの殉教の摘要」のなかでズリウス版にあるポリュクトの伝記を紹介し，それ以外のものはすべて創作であるとして，次のように述べている。

> ポリーヌの夢，セヴェールの愛，ポリュクトの有効な洗礼，皇帝の勝利を祝う供儀，私がアルメニアの統治者にしたフェリックスの威厳，ネアルクの死，フェリックスとポリーヌの回宗，こうしたものは劇作上の創作であり，粉飾である。[2]

後に見るように，この創作部分は劇曲『ポリュクト』の重要な部分を占め，『聖者伝』から採られたのはポリュクトの殉教という事実にすぎないといっても過言ではないだろう。「聖ポリュクトの殉教の摘要」では，自分の創作能力を自慢するかのように，『聖者伝』のなかのポリュクトのエピソードを詳述しているのだが，1660年の「自作吟味」においても，この問題に触れている。ここでは，より簡潔に書かれている「自作吟味」の冒頭の部分を紹介し，コルネイユ自身が語る歴史的事実と創作の対比を明らかにしておこう。

この殉教はズリウスによって1月9日とされている。ポリュクトは紀元250年にデキウス皇帝の治下に生きていた。彼はアルメニア人で，ネアルクの友人，そしてキリスト教迫害の勅令を実施するよう皇帝から委任されたフェリックスの婿でもあった。この友人が彼にキリスト教徒になる決心をさせると，彼は公布されていた勅令を破り，崇拝するための偶像を祭壇へ運んでいた人々から偶像を奪い取り，地面に叩きつけ，フェリックスが自分たちの宗教へ彼を連れ戻そうとして派遣した妻のポリーヌの涙に耐え，血の洗礼の他はいかなる洗礼も受けずに，義父の命令によって命を落とした。以上は歴史が私に貸し与えてくれたことである。その他は私の創作である。(3)

以上で，歴史的事実と創作部分の概要が理解できたであろう。

1．『ポリュクト』の粗筋

『ポリュクト』のテーマを論ずる前に，粗筋を見ておこう。粗筋はすでに一つの解釈になるので，最も客観的に書かれていると思われるカステックスの教科書版のものを翻訳することにする。(4)

（第一幕）メリテーヌで，キリスト教徒のネアルクは，最近回宗したアルメニアの領主のポリュクトに，洗礼を受けるように勧める。しかし，数日前に結婚したばかりのポリュクトは，夢で夫の死を見た妻のポリーヌに逆らうことをためらう。それにもかかわらず，彼はネアルクの議論に負け，夫の出立を快く思わないポリーヌに別れを告げる。この若い妻は召使のストラトニスに次のことを打ち明ける。彼女はかつてローマでセヴェールという兵士を愛

したのだが，父親のフェリックスは財産がないという理由で結婚に反対した。絶望したセヴェールは戦場へ死を求めにいく。彼女の方はアルメニアの統治者に任命された父親に従い，従順な娘なので，アルメニアの大貴族のポリュクトと結婚した。そして，彼女は，夢の中で，ポリュクトを殺して恨みを晴らすセヴェールの姿を見たのである。そこへ，フェリックスが仰天して登場する。セヴェールは死んでいないのだ。ペルシャ人を征服して，皇帝の寵愛を受けた彼が，生贄を捧げて神々に感謝しにやってくることになったのだが，フェリックスは，彼が復讐するものと思い，娘に彼をなだめるように頼む。従順な娘のポリーヌは，言うことを聞く。

（第二幕）セヴェールは，ポリーヌが結婚していることを知って，悲嘆にくれる。ポリーヌが突然現れ，セヴェールの希望をいっさい断ち切ろうとするのだが，徐々に感情が昂まり，彼に対してまだ愛情が残っていることを告白する。しかし，彼女の義務のほうが強い。セヴェールはあきらめて，もう彼女に会わないことにする。ポリーヌは疲れ果て，不安に駆られて，洗礼から戻ったポリュクトに二度とセヴェールに会わない決意を知らせる。人々は儀式を行うため寺院でポリュクトを待っている。恩寵に照らされた彼は偽りの神々の偶像を破壊するつもりでいる。より冷静なネアルクは彼を押し止めようとするが，ポリュクトは彼を引っ張っていく。

（第三幕）ポリーヌは一人で内面の苦しみを語る。ストラトニスはポリュクトの回宗を知らせにやってきて，偶像破壊のことを憤慨して語る。フェリックスが怒って駆けつけてくるが，彼は，彼の婿がネアルクの処刑に立ち会えば，前言を取り消すであろうと思っている。しかし，ポリュクトは，その光景を見て動揺することはなかった。フェリックスは彼に懇願することにし，娘に彼のところへ話しに行かせる。召使のアルバンに，フェリックスは動揺する気持ちを打ち明ける。

（第四幕）ポリュクトは，ポリーヌが訪れてくることを知り，セヴェールを呼び寄せる。彼は，瞑想に耽り，地上の財産に別れを告げ，天井の幸せを賛美する。ポリーヌは，あらゆる手段を用いて，彼を説得しようとする。少しも揺るがないポリュクトは逆に反撃に出て，ポリーヌを回宗させようとする。死ぬ前に，彼は妻をセヴェールの手を委ねるのだが，ポリーヌは，夫を救って，もういちど寛大な気持ちを示してくれるようにセヴェールを説得する。セヴェールは恋仇のために仲介に入る決心をする。

（第五幕）フェリックスは彼の婿の運命をぎりぎりまで引き伸ばす。しかし

彼はポリュクトの憤りと誘導尋問に直面する。ポリーヌは，初めは一人で，次いで父親と一緒になって，夫を説得しようとする。ポリュクトはキリスト教の信仰の表明で答える。フェリックスは彼を死刑台に送ろうとするが，ポリーヌは彼の足元にすがりつく。フェリックスはアルバンにポリーヌの面倒を見させる。ポリーヌは，夫の殉教に立ち会い，父親の残酷さを咎め，キリスト教信仰を表明する。フェリックスも恩寵に触れる。セヴェールは，動揺し，キリスト教徒に対する同情を宣言し，キリスト教徒迫害の終結の勅書を出す約束をする。

2．『ポリュクト』のテーマ

以上の粗筋から分かるように，一般に『ポリュクト』は，ポリュクト，ポリーヌ，セヴェールという主要人物間の愛情の悲劇と見られがちであるが，他方，恩寵の悲劇と見る解釈もある。ドゥブロフスキーは，『ポリュクト』解釈の変遷を次のようにまとめている。

> 『ポリュクト』は，伝統的な解釈によれば，コルネイユ演劇において例外的な位置を占めてきた。それは，『テオドール』と共に，世俗的な劇作法による唯一のキリスト教悲劇だからである。それは，多くの人々にとって，フランス語によるキリスト教悲劇の傑作でもあり，つまるところ，この点では，『ポリュクト』と『アタリー』のどちらかを選ぶことになるだろう。ところが，この『ポリュクト』の根底にある《キリスト教》というものは，長い間，誤解されるか，過小評価されてきた。17世紀において，多くの人々は，これを問題にした。それは，18世紀になると，そこに見られる不気味なものが冗談によって一掃されるのを望んでいるかのようである。それは，セヴェールとポリーヌの《恋物語》にしか関心をもとうとしなかった時代である。偉大な宗教劇としての『ポリュクト』というのは一つの発見であり，キリスト教の病にかかったロマン主義者たちの発明と言ってもよいだろう。従って，「コルネイユが描いたのは，キリスト教の情念であり，地上の愛と天上の愛の間の闘いである」という『キリスト教精髄』の有名な章は，何世代にもわたって，お手本となるであろう。(5)

コルネイユの『ポリュクト』がロマン主義時代に如何に人気を得たかはドニ

ゼッティによってオペラ化されていることからも分かるが，ドゥブロフスキー自身は，上記のような解釈の変遷を述べながら，宗教劇として特別扱いする立場を取らず，コルネイユ劇の一貫性を主張している。

始めから,『ポリュクト』の霊感は，コルネイユ劇の本質的なテーマを再発見し，集約している。いかなる断絶もないし，急変もない。批評家の便宜上,『ポリュクト』は他の戯曲から区別されているが，それどころか，この作品は他のものと関係があり，同化しているのである。(6)

今日からすれば，このドゥブロフスキーの見解は，平凡である。それは，コルネイユ悲劇を〈意志の悲劇〉，〈義務の悲劇〉と見る従来の文学的解釈の延長上にあるからである。むしろ,『ポリュクト』の特異性を支援する理論の不十分さをこそ問題にし，この戯曲を聖と俗との交流からなるバロック的宗教劇と見なすとき，新たな展望が開けてくるように思われる。『ポリュクト』を一連のコルネイユ劇のなかで特別扱いする解釈の根底にあるのは，〈恩寵〉という神秘的なものが人物の行動原理の重要な要素を占めているからである。一般に主要人物の死は悲劇の大詰めになるのだが,『ポリュクト』の場合は，主人公のポリュクトの死はむしろ栄光であって，彼の死が大団円を形成することはない。このことから〈恩寵の悲劇〉という解釈が生まれるのである。「恩寵の奇跡がこの戯曲の中心テーマ」(7) と考えるカルヴェは，次のように述べている。

主人公の死が悲劇の大詰めである，と古典主義者の批評家は言う。従って，ポリュクトが死んだときに，芝居は終わるのである。この解釈は，死が実際の結論であり帰結である世俗的な悲劇の場合は，正しい。しかし，この聖なる悲劇においては，ポリュクトの死は，彼の栄光の始まりであり，彼が愛し後に残す全ての人々に降りかかる功徳の源泉なのである。従って，芝居は続き，ポリュクトと彼の殉教との関係において全ての登場人物を位置づけたときに始めて終わるのである。(8)

確かに,『ポリュクト』は，このように解釈することができる。しかし，それはアリストテレスの理論，すなわち悲劇は憐憫と恐怖の情を引き起こさねばならないという理論に抵触する。なぜなら『ポリュクト』は憐憫の情は引

き起こすことができるが，恐怖の情に欠けるからである。コルネイユは後に有名な『三つの演劇論』（1660）を出したとき，この問題に触れ，次のように弁明している。

完璧な悲劇は，『ル・シッド』のロドリーグや『テオドール』のプラシードのように，主役によって憐憫と恐怖をかきたてられることにあるのだが，これは絶対的な必要条件ではないので，『ロドギューヌ』のように，その二つの感情を生ぜしめるために色々な人物を使うことはないし，『ポリュクト』のように，観客に二つのうちの一つの感情を抱かせるだけでもよいのである。『ポリュクト』の舞台は，恐怖は全くなく，憐憫しか植えつけることはない。このように定義すれば，あの哲学者の規則の厳格さも少しは緩和されるし，少なくとも都合のよい解釈となるだろうから，わがフランスの舞台で成功した多くの劇詩を非難するには及ばないのである。(9)

コルネイユはアリストテレスの『詩学』から導き出された理論の窮屈さに反感を覚えて拡大解釈を試みており，これもその一つなのだが，前述のカルヴェの解釈と合わせると，「聖なる悲劇」には「憐憫」のみでよいことになる。これは，かなり大胆な拡大解釈である。むしろ，「聖なる悲劇」と「世俗的な悲劇」を区別し，「聖なる悲劇」独自の理論を展開する方が理にかなっているように思われ，言い換えれば，「聖なる悲劇」（「宗教劇」と言ってもよい）に一般的な演劇理論を当てはめること自体が無理のように思われる。ドウブロフスキーは，はっきりと次のように言う。

実際，英雄的な意図は，本質的に，反キリスト教的なのである。従って，ペギーが望んだように，『ポリュクト』が他のコルネイユ劇と正に連続性があるとすれば，それは，この劇がキリスト教的であるからではなくて，逆に，『ポリュクト』は，見かけにもかかわらず，キリスト教的作品では少しもないからなのである。(10)

しかし，コルネイユ自身は，聖か俗かという二分法を認めず，むしろ両者の融合を計るために，宗教劇のなかに恋愛劇を取り込んだらしい。それは古典主義演劇理論の最大のモットーである「喜びと効用」の両者を満足させるためである。前述の「聖ポリュクトの殉教の摘要」のなかで，彼は次のように

述べている。

喜び（le plaisir）がひそかに効用（l'utilité）を吹き込み，それが人々の心の中に効用の念を抱かせる媒介物のような役目を果たすためには，（『聖者伝』の）上演を楽しいものにすることが時宜にかなっているので，歴史的真実とその粉飾を識別するための知識を与え，聖者を尊敬すべきであると知らしめることも正しいのである。(11)

つまり，コルネイユに言わせれば，殉教という〈効用〉を人々の心に植えつけるには恋愛という〈喜び〉を混ぜ合わせて，芝居を楽しいものにする必要があったのである。それはまた「信者と世俗の人々を同時に満足させる」方法でもあった。

人間的な恋愛感情が天上的なものの厳格さとうまく融合しているので，その上演は信者と世俗の人々を同時に満足させるのである。(12)

こうして出来上がった作品にコルネイユは絶対の自信をもち，「演劇的な秩序がこれほど素晴らしく，場面の繋がりがこれほどうまくいった作品を今まで書いたことがない。筋の一致，時間，場所の一致も正確である」(13) と述べているほどである。

しかし，コルネイユがいかに〈人間的なもの〉と〈天上的なもの〉の融合を計ったと言っても，ドラマの発展動機が〈恩寵〉（grâce）にある限り，〈天上的なもの〉が優位にあることは否めない。この点について，カルヴェは次のように述べている。

『ポリュクト』を例外的に悲劇にしているのは，恩寵である。他の作品の場合，『ル・シッド』も，『シンナ』も，『オラース』も，『ポンペイ』も，コルネイユは，月並みなものや自分自身を超越して高揚する主人公のありさまを描いてきた。彼らは人間性の頂点を極めた，と言ってもよい。人間の力では彼らをそれ以上高いところへ持ち上げることはできない。しかし，超自然の力である恩寵は，彼らを目のくらむような高いところへ運ぶことができる。コルネイユが『ポリュクト』において描きたかったのは，そうした高揚なのである。その主人公を俗な用語で判断すべきではない。彼が

素晴らしいか，真似できるか，残酷か，野蛮かどうかなどということは問題ではないのである。彼は，人間の領域にはいないのである。彼は，神に取りつかれているのである。栄光，愛国主義，寛大のヒーローがいるように，恩寵のヒーローがいるのである。この恩寵のヒーローは他の人々の関心を引くほど人間的なのだが，彼は彼の心をつかんでいる至高の霊によって人間を超越したところへ連れ去られる。それが彼を新しくすがすがしく生まれ変わらせる洗礼の恩寵なのである。いかなる過ちもその効果を遅らせることができず，その行為を凍結することができないので，それは魂の奥底にまで侵入し，それを激しいヒロイズムへ駆りたてる。ポリュクトの行為は，最初は，どこか奇妙で，慣習や掟に反するところがある。しかし，恩寵の働きは，どこか神秘的で意表を突くところがあるものなのだ。(14)

この主人公の行動の動機が恩寵にあるという見方は，アダンも同意見である。

『ポリュクト』は，恩寵の悲劇である。つまり，この戯曲は，人間の理解を越え，人間の理性や意識では把握できない神秘的で超自然的な力を介入させている。それは，つまり，コルネイユの悲劇の慣習的な枠を破裂させる力である。慣習的な枠内では，明確な理性によって説明できないような行動は見られず，いかなる動機がオラースとかエミリーとかオーギュストの振舞いを決定づけているかを正確に知ることができた。ポリュクトの決断，ポリーヌやフェリックスの回宗は，いかなる検証可能な力をもってしても説明できないのである。(15)

以上に見られるように，この〈聖〉と〈俗〉の融合からなる悲劇は，理性を越えた神秘的な力が主人公の行動の原理になっているがゆえに，形式的には古典主義理論を厳密に守りながら，バロック的精神に貫かれているのである。恩寵が作用するのは，主人公ばかりではない。最終的に回宗するポリーヌにもフェリックスにも，恩寵は働いている。さらにはキリスト教徒迫害を中止するセヴェールにも作用し始めている。ここで，もういちど筋を追いながら，登場人物に作用する恩寵の有り様を分析してみよう。

3．『ポリュクト』における恩寵の効果

《ポリュクトの回心》。友人のネアルクの勧めで洗礼を受ける決意をしたポリュクトであるが，妻のポリーヌが見た不吉な夢の話を聞いて，決心がにぶる。その夢とはどのような内容なのか。第一幕三場においてポリーヌは，かつてローマにいたときにセヴェールと恋愛関係にあったことを話してから，前の晩に見た夢の内容を侍女のストラトニスに次のように語っている。

私は，昨夜の夢に，あの不幸なセヴェールを見たのです。手に刃をもち，目は怒りに燃えていました。あの人は見捨てられた亡霊が墓場から迷い出るときに身につけている惨めなボロなどまとっていませんでした。命を落として名声を得た栄光の傷も付いていませんでした。勝ち誇り，二輪馬車に乗って皇帝がローマに凱旋入場するかのようでした。あの人の姿を見ると，少し恐ろしくなりましたが，「裏切り者め，私のものであった愛の証しを好きな奴にくれてやるがよい。今日が終わったら，お前の選んだ夫のために心ゆくまで泣くがよい」と，あの人は言うのです。この言葉を聞いて，私は震え，心は乱れました。それから，不敬虔なキリスト教徒の一団がポリュクトを恋仇の足元に突き倒したのです。私は咄嗟に夫を助けようと思って，父親を呼びました。ああ，何ということでしょう！絶望するほかありません。父親までが，手に短剣をもち，腕を振り上げて，夫の胸を刺そうとして入ってくるではありませんか。そのとき，苦しみのあまり，幻像は乱れました。ポリュクトの血が，彼らの怒りを静めました。彼らがいつどのようにして夫を殺したのか私には分かりませんが，すべての人が夫の死にかかわっていたことは確かです。これが私の見た夢です。

（一幕三場）

この夢は悲劇にしばしば見られる未来を暗示する予言とか占いに等しく，この戯曲においても重要な役割を果たしている。ポリュクトは妻の夢の話を聞いて，洗礼を受ける決心がにぶる。その理由は自分の死が暗示されているからというよりは，セヴェールの存在に対する気掛かりの方が大きかったろう。そのようなポリュクトの気持ちに構うことなく，友人のネアルクはポリュクトに洗礼を受けるようにけしかける。

なに？君は女の夢などを気にするのか！君ほどの立派な魂の持ち主が，そんな取るに足らないことで思い悩むのか！何度も戦いの試練を経た勇者が，女の見た夢の脅威に怯えるとは！　（一幕一場）

妻の夢が気になるポリュクトは，妻の気が静まるまで，洗礼の時期を延ばしてほしいと申し出る。しかし，ネアルクは聞き入れず，次のように説教する。

神は常に全く正しく，全く善なのだが，神の恩寵は常に同じ効力をもって下されるとは限らないのだ。長引かせて時間を失うと，恩寵にも心に浸透するひらめきがなくなり，われわれの心の方も堅くなり，恩寵を押し返し，遠ざけてしまうのだ。恩寵を注いでいた神の力も出し惜しむようになり，幸福へ導くはずの聖なる熱情もめったに生ずることがなくなり，働かなくなる。君を洗礼に駆りたてた熱情も，すでに弱まり，初めと同じではない。奥方の嘆きを聞かされたくらいで，情熱は冷め，消え失せようとしているではないか。　（一幕一場）

ポリュクトは自分の熱情に変わりはなく，延期を申し出たのは妻への愛情のためと言うのだが，ネアルクは受け付けない。

ポリーヌには泣かせておくがいい。現世にうつつをぬかし，後ろ髪を引かれ，自分の選択に迷い，神の声に呼ばれていながら，他の声に耳を貸すような心なぞ，神はお望みでないのだ。　（一幕一場）

「では，神に身を捧げるには，誰も愛してはいけないのですか？」と尋ねると，ネアルクは次のように答える。

われわれはすべてを愛することができる。神はそのことを許し，命じてもおられる。しかし，率直に言えば，この主のなかの主は，最高の愛と最高の栄誉をお望みだ。神の至高の偉大さに匹敵するものはないのだから，まず何よりも神を愛し，何かを愛するにしても神の次だ。神に気にいられるためには，妻も財産も地位も忘れることだ。神の栄光のために危険を冒し，血を流さなければならないのだ。しかし，君はそういう完璧な熱情からいかにほど遠いことか。それが君には必要であるし，私も望んでいるものな

のだ。私は目に涙を浮かべずに話すことはできない。ポリュクト，今やどこでもわれわれは憎まれ，われわれを迫害することが国に忠誠を誓うことだと思われ，キリスト教徒は激しい苦悩にさらされている。奥方の涙に耐えられないで，どうしてキリスト教徒の苦悩が乗り越えられようぞ？

（一幕一場）

このネアルクの説得が効を奏し，ポリュクトは妻に内緒で洗礼を受けに行く決意をする。一方，行方不明になっていたセヴェールは生きていて，ペルシャ軍を破って凱旋将軍となり，皇帝の寵愛も獲得し，その勝利を知らせにアルメニアの地へやって来ることになる（ポリーヌの夢の第一の実現）。セヴェールのアルメニア訪問の理由は犠牲（いけにえ）を捧げて神々に感謝する儀式を行うことにあるのだが，これは表向きの理由であって，実際はポリーヌに会って結婚を申し込むためなのである。しかし，ポリーヌが結婚していることを知って，セヴェールは衝撃を受ける。フェリックスは結婚に反対したことによるセヴェールの復讐を恐れ，ポリーヌにセヴェールの気を静めるように頼む。ポリーヌとセヴェールの再会。ポリーヌはセヴェールに未練が残っていることを知るが，理性によって抑え，お互いの幸せを祈って別れる。ポリュクトがセヴェールに殺されるというポリーヌの夢が実現しなかったことにストラニストは喜ぶが，ポリーヌはまだその気になれない。神殿において犠牲を捧げる儀式が行われようとしている。洗礼を終えたポリュクトが出席しようとすると，ネアルクは異教徒の儀式に行くのを止めるように言う。この場面の二人の議論を見てみよう。

ネアルク：彼らの祭壇へ行くのは止めろ。

ポリュクト：私はその祭壇をひっくり返してやりたいのだ。彼らの神殿のなかで死ぬか，祭壇を投げ飛ばすかだ。さあ，ネアルク君，彼らの目の前で，偶像崇拝に挑戦し，われわれが何者かを見せてやろう。これが天の期待していることだ。実現しなければならない。私は今そのことを約束してきたばかりだ。これからそれを実行するのだ。君が教えてくれた神に，こんなに早く機会を与えてくれたことを感謝したい。神は善意から早くも私に栄誉を与えるために，さきほど私に与えてくださった教えを試してくださるのだ。

ネアルク：その情熱は度が過ぎている。自制するがよい。

ポリュクト：敬う神に対して情熱をもち過ぎるということはない。
ネアルク：死ぬことになるぞ。
ポリュクト：神のためなら望むところだ。
ネアルク：もし君の心が揺らいだら？
ポリュクト：神が支えとなるだろう。
ネアルク：神は死に急ぐことを命じてはおられぬぞ。
ポリュクト：死は自発的であればあるほど，価値があるのだ。
・・・
ネアルク：もう隠しはせぬ。君に従うのが苦痛なのだ。恐ろしい拷問にあうのが恐いのだ。
ポリュクト：確信の道を歩くものは，倒れることなど恐れはせぬ。必要なときに，神が無限の力を貸してくださるのだ。心のなかで神を否認するようでは，神を否認したも同然だ。神を否認できると思っているのだから，自分の信仰も怪しいものだ。
ネアルク：何も恐れないものは，自信過剰になりがちだ。
ポリュクト：私はすべてを神の恩寵にまかせているのであって，自分の弱さなど当てにしないのだ。ところで，私を急き立てるどころか，私のほうが君を急き立てるとは。その冷淡さは何ゆえなのだ？
ネアルク：神も死を恐れておられるのだ。
ポリュクト：でも，神は身を投げ出された。あの聖なる労苦に従おうではないか。偶像の山の上に神の祭壇を築こうではないか。（またしても君の言葉が思い出されるのだが），神に気にいられるためには，妻も財産も地位も忘れることだ。神の栄光のために危険を冒し，血を注がねばならないのだ。（第二幕六場）

こうした問答が続き，ついにネアルクは納得し，一緒に神殿に向かう。ここでは二人の立場が逆転している。一幕目ではネアルクの〈言葉〉が洗礼を躊躇するポリュクトを説き伏せたのに対し，二幕目ではポリュクトの〈言葉〉がネアルクを説得する。とくに一幕目でネアルクが用いた「神に気にいられるためには，妻も財産も地位も忘れることだ。神の栄光のために危険を冒し，血を注がねばならない」という台詞が，こんどはポリュクトによってネアルクを説得する言葉として使われているのは注目しておいてよい。

神殿ではセヴェールとポリュクトが出会っているはず，何事もなければよ

いがと不安に駆られるポリーヌのところへ，ストラトニスが神殿の様子を知らせにくる。それによるとポリュクトとネアルクがフェリックスたちの信ずる神々を冒涜し，偶像を引き倒したとのこと。フェリックスは，まずネアルクを処刑し，そのありさまを見てポリュクトが反省することを期待する。しかし，ネアルクの処刑を見たポリュクトには反省の気配が全く見られない。

牢獄のポリュクトのところへポリーヌが会いにくるという知らせが入る。ポリュクトは衛兵に頼んでセヴェールを呼びに行かせる。一人になったポリュクトは，もの思いにふける。その長いモノローグは，バロック的ヴァニタス（虚無）思想に満ちている。冒頭の部分を引用してみよう。

悲惨さを生む甘美な泉よ，偽りの快楽よ，私をどうしようというのだ？肉体と現世への恥ずべき執着よ，私はお前を捨てたのに，どうしてお前は私から離れないのだ？去るがよい，私に挑戦する名誉よ，悦楽よ。

お前たちの喜びはことごとく，
変わり易さに支配され，
たちまちのうちに崩れ去る，
それはガラスの輝きを持つように，
その壊れ易さも持っている

（第四幕二場）

ポリーヌが訪れ，ポリュクトに改心を勧める。ポリュクトは，モノローグで述べたヴァニタス観を繰り返して，動じない。ポリーヌの説得も空しく，ポリュクトは逆に妻がキリスト教徒になるように祈る 。

私は涙を流している。涙を流してお前のかたくなな心に風穴を開けることができたら神に感謝したい！私がお前を追いやった嘆かわしい状態は，私の愛情から流れ出る涙にふさわしい。天国で何らかの苦しみを感じたら，あまりにも不幸なお前のために嘆きもしよう。でも，あの栄光と光りに満ちた住まいで，あの正しい善良な神が私の祈りを聞き届け，夫婦の愛に耳を貸してくださるなら，神は盲目のお前に光明を放ってくださるだろう。主よ，ご慈悲によって妻を獲得させてください。妻は十分に徳があり，キリスト教徒になれないはずがありません。主は妻をお創りになったとき，あまりにも多くの長所をお与えになったのに，主を知らず，主を愛するこ

ともなく，異教の不幸な奴隷として生き，生まれたときのように悲しいくびきに繋がれて死んでいくのです。（第四幕三場）

ポリーヌが驚いていると，ポリュクトはさらに次のように続ける。

防御しても無駄だ。この神は，あまり神のことを考えていなくても，心に触れるのだ。その至福の時はまだ来ていないが，それはいつか来るだろう。でも，その時は私にも分からない。（第四幕三場）

ポリーヌはついに説得を諦める。そこへセヴェールが現れる。驚くポリーヌに，ポリュクトは彼を呼び寄せたのが自分であることを説明し，セヴェールにはポリーヌと一緒になるように頼み，処刑場へ赴く。残されたポリーヌとセヴェールは互いに愛情を感じながら，ポリーヌはポリュクトの命を救ってほしいとセヴェールに頼む。セヴェールは身の不運を嘆きながら，ポリュクト助命の努力をする決意をし，また他方で彼自身キリスト教に対して好意を持っていることを従者のファビアンに明かす。

フェリックスはセヴェールがポリュクト助命の嘆願に来たことに不信を抱く一方，最後の説得をするためにポリュクトを呼び寄せる。フェリックスはキリスト教徒に好意を示すような口振りで ポリュクトの説得にかかるが，失敗する。ポリーヌも加勢するが，失敗。フェリックスはついにポリュクトの死刑を命ずる。

《ポリーヌの回心》。ポリュクトの後を追い，夫の処刑をみたポリーヌが父親のところへ戻ってきて，次のように言う。

野蛮なお父さま，やり遂げなさるがいいわ，お仕事を最後の最後まで。この二番目の犠牲者は，あなたのお怒りにふさわしいでしょう。あなたの婿殿にあなたの娘を結び合わせるのです。さあ，何をぐずぐずしてらっしゃるのです？．．．夫は死んで私に光明を残してくれました。あなたの首切り役人が私に浴びせかけた夫の血が，私の目を覚まさせ，それを開かせてくれたのです。私には見えます。分かります。信じられます。私は迷いから覚めたのです。あの至福の血の洗礼を受けたのです。私はついにキリスト教徒になったのです。まだ言い足りませんか？私を殺してあなたの地位と信用を維持なさいませ。皇帝に気を遣い，セヴェールを恐れたらいいで

しょう。あなたが死にたくなければ，私の死は必定です。ポリュクトが幸せな死に私を招いています。ネアルクも見えます。彼は私に手を差しのべています。．．．絶望ではありません。まだ言う必要がありますか，フェリックス？私はキリスト教徒なのです。私の死によってあなたの運と私の運が決まります。この死はどちらにとっても大切なものになるでしょう。お父さまには地上の地位が保証され，私は天国へ昇れるのですから。

（第五幕五場）

このポリーヌの回心は直接的にはポリュクトの血による洗礼が原因だが，前幕のポリュクトの〈言葉〉による説得が遠因になっていることを忘れてはならない。また，ここで恩寵（la grâce）という言葉が明確に使われていることに注目しておく必要がある。

《フェリックスの回心》。このあと，セヴェールは，彼の懇願を聞き入れずにポリュクトを処刑したフェリックスを非難する。すると，フェリックスは，次のように答える。

残酷な行為によって，自分の下らない権威を守ろうとしたからといって，もう私を責めないでください。その権威の偽りの威光など，あなたの足元に投げ出します。私があえて望んでいる権威は，もっと華々しい地位なのです。私は不思議な魅力に引きつけられているのです。私は自分も知らない激情に屈したのです。自分でも理解できない情動が起こって，自分の狂気が婿の熱情に乗り移ったのです。疑わないでください。ポリュクトの潔白な血が，彼を迫害した私のために，全能の神に祈ってくれたのです。彼の愛は家族全体に広がり，娘と同様に父親までも引き寄せたのです。私は彼を殉教者にしました。彼の死が私をキリスト教徒にしたのです。私は彼を完全に幸福にしてやったのですが，彼も私を幸福にしようとしているのです。これがキリスト教徒の復讐であり，怒りなのです。残酷な行為も結果がかくも甘美であれば，有り難いことです。手をお貸し，ポリーヌ，さあ，縄をもってくるがよい 。この二人の新しいキリスト教徒をあなた方の神々の犠牲に捧げてくれ。私はキリスト教徒，娘もそうだ。どうぞあなたのお怒りのままに。

ついにフェリックスまでもが回心する。その要因をフェリックスの台詞から

拾ってみよう。まず「不思議な魅力」（un secret appas)に引きつけられ、「激情」(des transports）に屈し，「狂気」（ma fureur）がポリュクトの熱情に乗り移ったのである。このうち「激情」（des transports）の果たす役割が重要であるが，この言葉は，クラッシック・ラルースの教科書版の注に〈ceux de la grâce〉とあるように[16]，「恩寵」の働きを意味していることに注目しておきたい。

《セヴェールの改心》。そして，最後にもう一人，セヴェールも心を改める。前記のフェリックスの台詞に答えるセヴェールの台詞を見てみよう。

> かくも優しい光景に感動しない者がいるだろうか？このような変身は奇跡なくして起こりえない。あなた方キリスト教徒は恐らく人間を超越した何かをもっているのだろう。迫害しても無駄なのだ。．．．あなた方はキリスト教徒になっても，もう私の憎しみを恐れることはない。フェリックス，私はキリスト教徒が好きだ。私はキリスト教徒の保護者になっても，迫害者にはなりたくない。

セヴェールは回心するには至らないが，キリスト教徒を理解し，迫害を止める約束をする。もともと彼は異教の神々に疑問をもち，キリスト教徒に好意的であったし（第四幕六場），かっての恋人のポリーヌや恋敵のポリュクトに対しても寛大であった。そういうセヴェールではあるが，ポリュクトやフェリックス親娘の回心を見て心を動かされたとしても，立場上，信仰の自由を認めるぐらいが限度であろう。

4．『ポリュクト』と『キリストのまねび』

以上，『ポリュクト』の粗筋を恩寵が作用する場面に重点をおいて見てきたが，すでに述べたように，この戯曲には世俗的な愛の悲劇の要素もあり，とくにポリーヌとセヴェールの再会に場面は有名であるが，そうした場面は全面的に省略したことを断っておく。この作品は，ポリュクト，ポリーヌ，フェリックスという三人の人物の回心という変身を描いているのだが，その動機は恩寵であった。この恩寵が理性の理解を越えた神秘的な体験であることはすでに見た通りであるが，コルネイユが恩寵について教えられたのは，ルーアンのイエスズ会の学校の教師のデリデル神父からであったことを後に

明らかにしている（1668年の「デリデル神父へのオード」）。

> 恩寵について私達に教えてくださったのはあなたです。その力と優しさがどんなものかを。それがどのように作用し，どのように通過していくのかを。．．．[17]

また,『ポリュクト』出版の三年後の1646年5月18日付のヴォワイエ・ダルジャンソン（ノルマンディーの議員）宛の手紙の中には，次のような文面がみられる。

> 一般に詩が信仰を素材にして恩寵をうまく描くことがないのは確かであるが，その難点は詩固有の欠点というよりは，われわれ詩人の能力の使い方のまずさに由来すると私は常々思っていたし，神への情熱が人間に対する情熱よりも高められ正しければ，それに触れる心も文学というジャンルにおいていっそう大胆で燃えるような発作を覚えるであろうと確信していた。[18]

コルネイユは『ポリュクト』の次に『テオドール』（1646年初版）という殉教劇を書いているから，このダルジャンソン宛の手紙は直接的な『テオドール』を念頭においているのかもしれないが，彼の恩寵をテーマとする戯曲への情熱は『ポリュクト』をも十分に含みうるものである。

ところで，コルネイユはイエスズ会の学校で恩寵についての教えを受けて以来，この問題は常に念頭にあったように思われるが，そのことを証明する事実として,『キリストのまねび』の翻訳がある。この『キリストのまねび』の作者については，第一部が出版された1651年版の序文のなかに「かくも貴重な書物について教会が恩恵を負っている作者がジャン・ジェルソンなのかトーマス・ア・ケンピスなのか自分で調べるつもりはない」[19] と述べているように，定かでない。この作者の問題は，トーマス・ア・ケンピス説を有力としながらも，今日においても決着を見ていない。問題は作者ではなく，内容である。『キリストのまねび』の第一部の出版が1651年であるとはいえ，それは何度も繰り返して読んだ結果の翻訳であって,『ポリュクト』執筆当時も枕頭におかれていたことは十分に考えられる。

このコルネイユの『キリストのまねび』の翻訳は17世紀だけで32版を数え，

18世紀においてかなりの版を重ねたようだが，次第に忘れ去られていった。ところが，1941年に新しい版が出され，戦後の1948年にも出ている。この版を監修したF．デュコー＝ブルジェは，『キリストのまねび』の理論を次のように解説している。

言葉の建設的な意味で本当にためになる『キリストのまねび』の理論は，禁欲的であると同時に神秘的である。

この本は完璧への障害物が何かを教えてくれ，それを乗り越える方法を知らせてくれる点において，禁欲的である。

神秘的というのは，それが至高の知識へ導き，秘密を語るつましい作者が体験した経験や神の好みを明らかにしているからである。．．．

神秘と禁欲は区別されると考えてはならない。禁欲の始まりは，すでに洗礼が超自然的で神秘な生命の萌芽をわれわれのうちに植え付けているとはいえ，神秘とは独立している。その生命は信仰を通して主と無感覚的に一体化したものだが，それが神の恩寵を通して体験され，意識的に享受されるとき，神秘的生命という名称をもつのである。禁欲はそのような覚醒をうながすのである。しかし，その幸福をかみしめ始めている魂は，その喜びを保護し，それを増大するために，もっと正確に言えば，だんだん主を受け入れることができるようになるために，抜かりのない努力を惜しまないのである。従って，『キリストのまねび』のなかには禁欲的な金言と神秘的なものとが混ざり合っているのである。[20]

このように，禁欲的なものから神秘的なものへ移行する契機になるのが，神の恩寵なのである。ポリュクトも（不完全ながらポリーヌもフェリックスも），こうした過程を体験している。また，コルネイユの『キリストのまねび』が第２次世界大戦中に出版されて広く読まれたことは，そこに見られる〈死の美学〉（ポリュクトの台詞「死は自発的であればあるほど価値がある」にも通じるものがある）が戦時中の死を正当化する理論として共感を呼び，わが国における『葉隠』に似た役割を果たしているのは興味深いことである。

ここで，『キリストのまねび』のなかに見られる〈禁欲的なもの〉と〈神秘的なもの〉に関わる詩句を紹介し，それが『ポリュクト』において殉教の道を選んだ人物たちの行動原理にいかに近いかを見てみよう。

富に富を重ねる空しさ。
名誉に飢えて思い悩む空しさ。
最高の幸福のために肉体と感覚の
憎むべき愛撫を選ぶ空しさ。
日々の流れを統御することなく,
命の長らえることを願う空しさ。
長き人生を愛して清き生活を無視し,
未来を配慮せずに現在を抱きしめ,
究極の幸福を期待するよりは,
今という時を尊重する空しさ。
だから汝，汝が何者であれ，汝の偽善的な感覚に
いかにして身を任せるべきかを知りたければ,
見るのに人間の目を，聞くのに耳を
寄せ集めてはならないことを思い出すがよい。
多くの偽りの魅力を逃れ,
見えないもののために見えるものを軽蔑し,
感覚器官によって伝えられた喜びを避けること。
そんなことで満足する言われはなく,
感覚による世俗的な甘美さに執着すると,
汝の良心を傷つけ，神から遠ざかることになるのだ。
（第一部第１章「神の道を歩むのに有益な意見」より）[21]

（キリストの言葉）
至高の幸福として自由を求めよ。
しかし，息子よ，思い出すがよい，あの真実を。
即ち，完全に自分自身を捨て去るべきことを。
さもなくば，汝は十全な自由を得ることはないだろう。
・・・
私に由来するもの以外は，全てが過ぎ去り，全てが飛翔する。
全てがたちまちのうちに真の虚無となって解消する。
一言で全てを言えば,
わが子よ，全てを捨てるのだ。そうすれば全てが見つかるだろう。
（第三部32章「自分自身とあらゆる種類の渇望を捨てねばならないこと」）[22]

（キリストの言葉）
汝の心の状態に安心してはならない。
息子よ，汝の安定は一瞬にして変わる。
一瞬がそれを覆し，その転覆が
いとも正当な目的の望みを欺くのだ。
．．．
かくして，あるときは喜びが，あるときは悲しみが
代わるがわる，汝の心を意志を反して捕らえるのだ。
あるときは平和が心を支配するが，同じ日のうちに
数かぎりない逆の動揺が心の弱点を襲うのだ。
（第三部33章「心の不安定と神に向けてうち立てるべき最終目的について」）[23]

（信徒の言葉）
天の聖なる恩寵よ，これなくして私は何もできない。
貴方は幸福の手ほどきをして下さり，その跡を追い，
それを完成するのにいかに必要なことか。
分かっています，主よ，神よ，私はあなたのために
何でも致します。恩寵が私の役目を決めて下さる限り，
その光が私を照らして下さる限り。
恩寵のないところに功徳はありません。
本性の恵みはことごとく，
その助けがなければ，偽瞞にすぎず，
よく照らされた目には軽視されるのです。
富，芸術，権力，美，
雄弁に才知，これらは神の威厳の前では
恩寵がなければ重きをなしません。
（第三部55章「本性の堕落と恩寵の効力について」）[24]

こうした現世の空しさと恩寵の重要性を説く『キリストのまねび』が『ポリュクト』の背景にあることは否めないだろう。「喜びと悲しみが代わるがわる汝の心を捕らえる」というキリストの言葉などは，フランソワ・オジエがバロック演劇の代表的なジャンルである〈悲喜劇〉を擁護して述べた文章と酷似しており[25]，ここにバロック演劇の思想的背景があると見てよいだろう。

5．『ポリュクト』のバロック性

『ポリュクト』の影響の下に書かれたとされるロトルーのバロック劇『聖ジュネ正伝』（1646）では，役者のジュネがキリスト教徒の役を演じているうちに役になりきり，自らキリスト教徒になって，実際に殉教する。ポリュクトは役者ではないが，此の世というはかない舞台における人間という役者であった。その人間がキリストを真似する（imiter＝jouer）ことは，すなわち殉教に至ることである。ポリュクトという人物をこのように捉えるとき，ただ単なる〈意志の悲劇〉という世俗的解釈を越えた，バロック悲劇の様相が見えてくるのである。この殉教というテーマは，視覚に訴えるバロック絵画の重要な画題でもあった。岡田温司氏は，この点について，次のように述べている。

苦痛と至福との，死の衝動と快楽原則との間の揺れ動きは，死を神の下への帰天として受け入れる殉教の聖者たちによってもまた体験されたのではなかっただろうか。その死はまさしく，責苦が歓喜へと転じる最も特権的な瞬間にちがいない。十六世紀にもそれは，例えばコルレッジオの《四聖人の殉教》のような作品の中で暗示的に表現されてはいた。だが，十七世紀は，程度においても量においてもかつての比ではない。

．．．

このように見てきて，われわれを少なからず驚かせるのは，バロックの画家たちがいかに法悦の表情や身体の表現に腐心しているかという点である。観る者を一種ミメーシス的な瞑想に誘うことが，観られる画像に求められているとするなら，そこに描かれる人物の形姿，とりわけ表情や身振りは極めて重大な鍵を握るとみなされたにちがいない。瞑想や法悦は，あくまでも内的な出来事であるにしても，何らかの身体的表象を伴うことは明らかであり，この身体をもってのみ，神秘的経験は見られるものとなるからである。バロックという文化が，神秘的恍惚の身体に特権的な地位を賦与した，あるいは，そのような表情や身振りの現れに対して非常に敏感に反応する眼差しをもっていたとするなら，それは画家たちの貢献に負うところが少なくなかったであろう。画家たちは，最もすぐれた法悦のコレオグラファーであったと言っても決して過言ではないだろう。[26]

「観る者を一種ミメーシス的な瞑想に誘う」ためには身体の果たす役割が重要であるという見方は，演劇においてこそ十分に発揮されうるであろう。しかし，演劇という世俗的なジャンルにおいて殉教という聖なる場面そのものを描くことは不謹慎であるとすれば，恩寵を受けた「神秘的恍惚」の身体表現が「特権的な」場面になるであろう。そして，そこではキリストの殉教を真似る殉教者が最高の地位にあり，次にその殉教者の恩寵に触れたものが続くであろう。それは，いわば役者の演技に感動する（＝触れる＝touché）観客の関係にも似ている。ポリュクトは，ポリーヌに対して，次のように言っていた。

この神は，あまり神のことを考えていなくても，心に触れるのだ。
Ce Dieu touche les coeurs lorsque moins on y pense.
（第四幕三場）

『ポリュクト』では，このような恩寵の連鎖が描かれているのである。それは，前述のロトルーの『聖ジュネ正伝』において，アドリアンという兵士の殉教がジュネという役者に連鎖するのにも等しいだろう。『聖ジュネ正伝』のなかで，キリスト教徒になったジュネは，次のように言う－「はかない此の世，そしてその取るに足らない栄光，それは喜劇だ。私はこれまで自分の役を知らずにいたのだ。．．．天使に導かれて，自分の台詞を教えてもらってから，私は自分の役を変えたのだ。．．．私は自分の罪に涙を流し，神は私の涙を見て，私を神の役者にして下さったのだ」[27]。ポリュクトも，神の役者になったのだ。そして，その役者の演技は，キリストを真似ているがゆえに神技に近く，それがポリーヌやフェリックスを感動させたのである。ポリュクトがその境地に至るには，ネアルクの言葉の力が大いに預かっていたし，ポリーヌの場合はポリュクトの言葉が，フェリックスの場合はポリーヌの言葉が〈言霊〉のように作用していた。このように，『ポリュクト』を恩寵による変身のドラマと捉えるとき，それは単なる夫婦愛のドラマではなく，また古典主義演劇の傑作という形式的評価に留まらず，むしろ演劇の分野におけるバロック精神の発露と見なすことができるだろう。ベルナール・シェドゾーは，この戯曲をバロックとの関連において，次のように述べている。

ポリュクトは強い意志をもったヒーローである。自らの栄光と名誉を気

遣う義務の男である彼の行動は，ポリーヌとフェリックスの魂に恩寵を導き入れる道を開いた。そこには，恩寵を作用させる人間の能力が存在し，それは舞台で上演されうるという観念が見いだされる。かくして，ポリュクトは，トリエント公会議のバロック芸術の理論と美学を共有するのである。フェリックスとポリーヌは，彼らを回宗させた救済の衝撃に服従するかのように描かれている。このため，ポリュクトは，真実らしくないとか技法に走り過ぎている（ここでは比較的ひかえ目であるにもかかわらず）という批判を前にして，びくともしないのである。[28]

恩寵と自由意志の関係はトリエント公会議でも未解決のままに放置された重要な問題だが，『ポリュクト』は，その〈恩寵の悲劇〉と〈意志の悲劇〉を演劇的に融合させて成功した希有な例と言えるだろう。

(註)

(1) *Examen(1660)* in *Théâtre complet de Corneille, tome II*, Garnier, p. 8.

(2) *Abrégé du martyre de Saint Polyeucte, op.cit.*, p.7.

(3) *op.cit.*, p.8.

(4) P.-G. Castex, P. Surer, G. Becker, *Manuel des études littéraires françaises, XVIIe siècle*, Hachette, 1966, p.46.

(5) Serge Doubrovsky, *Corneille et la dialectique du héros*, Gallimard, 1963, p.222.

(6) *ibid.*, p.224.

(7) J.Calvet, *Polyeucte de Corneille, la* Pensée Moderne, p.191.

(8) *ibid.*, p.187.

(9) *Discours de la Tragédie et des moyens de la traiter selon le vraisemblance ou le nécessaire*, in *Œuvres complètes*, présentation et notes de A.Stegmann, Seuil, 1963, p.832.

(10) *op.cit.*, p.225.

(11) *Abrégé du martyre, op.cit.*, p.6.

(12) *Examen (1660), op.cit.*, p.9.

(13) *ibid.*, p.9.

(14) *op.cit.*, pp.222-223.

(15) Antoine Adam, *Histoire de la littérature française au 17e siècle, tome I*, Del Duca, 1962. p.537.

(16) Corneille, *Polyeucte*, Classiques Larousse,1948, p.84.

(17) *Ode au révérend P. Delidel de la compagnie de Jésus, sur son traité de la théologie des saints*, in *Œuvres complètes*, op.cit., p.852.

(18) *Lettre à Voyer d'Argenson*, in *Œuvres comlètes, op.cit.*, p.852.

(19) *L'Imitation de Jésus-Christ, traduite et paraphrasée en vers français par P.Corneille*, présentée et annotée par F.Ducaud-Bourget, Albin Michel, 1948, p.42.

(20) *ibid.*, p.p.14,16.

(21) *ibid.*, p.57.

(22) *ibid.*, pp.342-343.

(23) *ibid.*, p.345.

(24) *ibid.*, p.436.

(25) 拙著『幻想劇場』, 平凡社, 1988, 第一章第一節「悲喜劇というジャンル」の項を参照。

(26) 岡田温司,「法悦と幻視－バロック的主題における図像とテクストー」,『イタリアーナ』'90-11, 日本イタリア京都会館, 平成2年10月, p.8.

(27) 拙著『幻想劇場』, 前出, p.209.

(28) Bernard Chédozeau, *Le Baroque*, Nathan, 1989, p.97.

(『ポリュクト』の台詞の訳文作成に使用したテクストは, 上記の Garnier 版と Classiques Larousse 版である。)